

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 中国語の概念メタファーに関する研究
— 認知メタファー理論の立場から —

氏 名 韓 涛

論 文 内 容 の 要 旨

メタファーは単なる言葉の装飾にすぎないとみなされてきた従来の理論とは異なり、認知メタファー理論では、メタファーを思考の根幹にかかわるものであると捉えている。この主張によって言語研究の新たな地平がひらかれ、Lakoff and Johnson 1980¹⁾以降、英語を中心としたメタファー研究が盛んに行われるようになった。しかしその一方で、中国語を考察対象とした研究は現時点においては本格的になされているとはいえず、認知メタファー理論の中国語への応用可能性、特に認知メタファー理論の立場から中国語の概念メタファーをどのように分析すればよいかが目下の最重要課題であるといえる。

本研究は、こうした現状を踏まえ、認知メタファー理論の立場から中国語における概念メタファーの諸相について考察したものである。理論的・実践的な側面から分析を試みると同時に、日本語と中国語、さらに日中英三言語の背後にみられる異なる思考様式や行動パターンにも焦点を当つつ、議論をすすめた。

本研究は序章、終章を除いて、以下の 8 章からなる。

第 1 章では認知メタファー理論の基本的な考え方について、中国語の具体例に基づいて考察した。具体的には①「起点領域と目標領域」、②「存在的対応関係と認知的対応関係」、③「概念メタファーとメタファー表現」、④「概念メタファーの性質」、⑤「メタファーのネットワークと継承」の 5 つを論じた。この 5 つは本研究のキーワードとなるもので、以降の章においてもそれぞれ考察対象となっている。さらに、中国における従来のメタファー研究にみられる問題点について指摘し、概念メタファーとメタファー表現を同一視する先行研究に対して、両者を区別するという本研究の立場を明示した。

第 2 章では認知メタファー理論の立場からメタファーの基盤という概念を取り上げて考察した。この概念はメタファー理論において重要な概念であるにもかかわらず、中国における従来のメタファー研究においてあまり論じられてこなかった。このことを踏まえて第 2 章では Lakoff and Johnson

1980以降対立する2つの立場、すなわちメタファーの基盤として共起性しか認めないものと共起性を含む複数の基盤を認めるものにそれぞれ焦点を当てて、どちらの主張がより合理的であるかという問題について、中国語の〈怒り〉のメタファー、〈水〉のメタファー、〈善悪〉のメタファーに関する分析を通して検証した。

第2章同様、第3章でもメタファーの理論的側面に考察の焦点を置いた。従来、1つの目標領域が複数の起点領域によって特徴づけられるということに関する議論は盛んになされてきたものの、1つの起点領域が複数の目標領域を特徴づけるということに関する議論はそれほど多くはない。こうした状況に鑑み、第3章では「メタファーのスコープ」という概念に考察の焦点を当てた。具体的には、英語との比較を交えながら中国語の〈火〉を起点領域とするメタファーの諸性質、①メタファーのスコープ、②メタファーの意味焦点、③メタファーの中心的写像を考察した。

続く第4章から第8章までは、中国語の概念メタファーに関する事例研究である。

第4章では概念メタファーの根源性の1つの現れとして中国語における〈空間〉のメタファーを取り上げた。具体的には「〈上下〉に代表される方向性をもつ〈空間〉」と「〈容器〉に代表される境界線をもつ〈空間〉」の2つに分けて考察した。

まず〈上下〉のメタファーについては中国語の方向補語“～起来”と“～下(来/去)”の用法、例えば“明起来”[明るくなる]、“暗下去”[暗くなる]といった表現の成り立ちに着目し、なぜ〈上〉を表す“～起来”が“正向”[プラス]形容詞と共起し、〈下〉を表す“～下(来/去)”が“負向”[マイナス]形容詞と共起するのかという問題について論じた。考察の結果、これらの組み合わせにみられる共起関係は人間の身体経験(知覚や運動感覚)、さらに文化・社会的要因に基盤を置く整列対応やメタファーによって動機づけられていることを解明した。

次に〈容器〉のメタファーについて、①〈身体部位〉が〈容器〉として概念化される際に、どのような抽象的概念がその〈内容物〉として概念化されうるか、②〈身体部位〉が〈内容物〉の存在形態(例えば〈個体〉か〈連続体〉か)に応じて、具体的にどういった種類の〈容器〉として概念化されうるかの2点を中心に考察した。1点目に関しては〈身体部位〉が容器化されたとき、〈感情〉〈考え〉〈言葉〉〈記憶〉などの抽象的概念がその〈内容物〉として理解されうるということを明らかにした。2点目については〈身体部位〉が〈内容物〉の存在形態、例えば〈個体〉であるかそれとも〈連続体〉であるかに応じて、〈密封容器〉や〈スクリーン〉といった種類の〈容器〉として概念化されうるということを解明した。

第5章では中国語の〈感情〉の概念化に焦点を当てて、メタファーが概念形成にいかに関与しているかについて考察をすすめた。

中国語話者がもっている〈名誉・不名誉〉という〈感情〉に関する理解は、先行研究でも指摘されているように、主に〈顔〉という概念に基づいている(例：“丢脸”[恥をかく]、“脸皮厚”[ずうずうしい])。第5章では〈顔〉がどういった概念を介してメタファー的に理解されるかを手がかりに中国語の〈名誉・不名誉〉のメタファー体系を、①〈容器〉のメタファー、②〈所有物〉のメタファー、③〈事象構造〉のメタファー、④〈評価性〉のメタファーの4つに分類した。そのうえで各メタファーの起点領域が〈名誉・不名誉〉のみを特徴づける、いわば固有の概念であるかどうかという問題を取り上げ、第1章でみた「メタファーのネットワークと継承」の観点から検討した。その結果、当該起点領域はいずれも概念固有的ではなく、〈名誉・不名誉〉の上位概念に当たる目標領域から起点領域を継承していることを解明した。

次に〈恋愛〉という〈感情〉に焦点を当てて、中国語話者が〈恋愛〉という概念について理解し語る際に、こういった起点領域が用いられるかについて考察した。考察の結果、①〈熱〉のメタファー（例：“炽热的爱情” [熱烈な恋]）、②〈火〉のメタファー（例：“点燃爱情” [愛を燃やす]）、③〈電磁気〉のメタファー（例：“放电” [色目を使う]）、④〈脆いもの〉のメタファー（例：“爱情是易碎品” [愛は割れやすいもの]）、⑤〈食べもの〉のメタファー（例：“爱情也有保鲜期” [恋にも賞味期限がある]）、⑥〈移動物〉のメタファー（例：“爱说来就来说走就走” [愛は来るのも去るのも早い]）、⑦〈植物〉のメタファー（例：“收获爱情” [愛を収穫する]）、⑧〈旅〉のメタファー（例：“漫漫情路” [長い道のり]）、⑨〈戦争〉のメタファー（例：“爱情的俘虏” [恋の虜]）の9つが得られた。各メタファーの具体例を、起点領域と目標領域にみられる様々なメタファー写像とともに提示し、各起点領域と目標領域を結ぶものは何であるかというメタファーの基盤問題も視野に入れて議論した。その結果、上記9つのメタファーは共起性基盤、構造的基盤、評価性基盤の3つに分類できることを明らかにした。

第6章では〈思考〉というより抽象的概念を考察対象とし、当該概念が中国語においてどのようにメタファー的に概念化されているかについて体系的な考察を試みた。

まず〈抽象物〉を空間において一定の輪郭をもった存在として概念化する、いわゆる〈もの〉メタファーの観点から、中国語における〈思考〉のメタファーを構成する複数のサブメタファー、具体的には、①《考えの性質は物理的なものの性質》（例：“思想深刻” [考えが深い]）、②《考えは力》（例：“被错误的念头束缚” [誤った考えに束縛される]）、③《考えは植物》（例：“成熟的想法” [成熟した考え]）、④《考えは食べもの》（例：“诱人的想法” [人を引き付ける考え]）、⑤《考えは液体》（例：“一股念头涌上脑际” [アイディアが頭に浮かんだ]）、⑥《考えは火》（例：“点燃思想之火” [思想の火を燃やす]）の6つについて論じた。次に、〈知覚〉〈飲食〉といった〈身体機能〉の観点から中国語話者が〈思考〉をどのように理解しているかについて分析した。そのうえで各メタファーの基盤問題に着目し、当該メタファーは共起性基盤、構造的基盤、評価性基盤のいずれかに分類できることを示した。

第7章と第8章では対照研究のアプローチから、中国語における概念メタファーの解明を試みた。

第7章では日英との比較を通して、中国語における〈コミュニケーション〉のメタファーについて考察した。英語では〈コミュニケーション〉が主に〈導管〉という概念を通して、日本語ではそれが主に〈液体〉のやりとりを通して理解されるのに対して、中国語では主に〈容器〉のメタファー、具体的にいえば、①〈言葉を発することは内容物を容器から出すこと〉（例：“从嘴里说出来” [口から出る] / “憋在肚子里” [腹におさめる]）、②〈言葉を受け入れることは内容物を容器に入れること〉（例：“传到耳朵里” [耳に入る] / “堵住耳朵” [耳を塞ぐ]）、③〈言葉は物理的なもの〉（例：“涌了上来” [湧き上がる] / “一串话” [ひとつながりの言葉]） / “掏出来” [(手を突っ込んで) 取り出す] という3つのサブメタファーに基づいて通俗的に理解されると結論づけた。

第8章では日中対照の角度から、《言葉は流動体》というメタファーについて考察した。〈言葉〉は〈流動体〉という抽象度の低いレベルで概念化される日本語に対して、中国語では〈言葉〉は〈容器〉—〈内容物〉というより抽象的レベルで概念化されている可能性が高いと結論づけた。

認知科学における重要な発見の1つとして「抽象概念の大部分はメタファーに基づいて理解される」というのがある。本論文では中国語のメタファーに関する分析を通してこの主張の妥当性をさ

らに裏づけた。これは、本論文で取り上げた中国語の具体例の大部分が詩歌など特殊な分野で用いられる特殊な表現ではなく、日常生活で使用されるごく一般的な言語表現であるにもかかわらず、程度の差こそみられるものの、いずれもメタファーの色合いを帯びているというところからも窺える。

<注>

1) Lakoff, George and Mark, Johnson. 1980. *Metaphors we live by*, University of Chicago Press.